

山と博物館

第54巻 第4号 2009年4月25日

市立大町山岳博物館



カッコウウゞ (撮影 中村照男)

企画展「羽は語る」に寄って

中村 照男

鳥の一番の特徴は翼で自由に空を飛べる事である。ペンギンやダチョウのように例外もいるが、ほとんどの鳥は自由に空を飛ぶ事が出来る。しかし鳥は空を飛ぶ為に体の様々な部分を犠牲にしているのだ。

骨は体を軽くする為に空洞になっているし、手は翼になったので物を掴めない。

それでも獣などの敵に襲われた時、空に逃げれば助かる確率は高まるし、餌を求めて広い範囲を行動出来るのは、生きて行くのに有利である。動物の中にも飛べる者がいる。ムササビは滑空だけだが、コウモリはかなり自由に飛び回れる。それでも鳥と比べると飛翔能力は劣るし、やはり翼に羽を持っているか、いないかの差のような気がする。鳥の翼の特徴は何と言っても羽で出来ている事である。羽は軽くて丈夫で保温性にも優れている。しかも少々裂けてもクチバシでしこけは修理可能と伝う仕掛けも持っている。そして定期的に新しく生え替わるし、色彩も様々でゞは早を惹き付ける化粧の役目もしている。鳥が鳥であるのは、羽の翼を持っているからである。(日本野鳥の会会員)

企画展「羽は語る」開催のお知らせ

鳥はそれぞれ種類によって、生えている羽の形や大きさ、色、模様などが決まっています。野外を散策のおり見つけることのできる野鳥の羽に焦点をあて、一枚の羽から知ることのできる様々な羽の不思議に迫ります。

企画展開催期間 平成21年4月29日(火)～5月31日(日)

期間中の休館日 5月7日(木)、11日(月)、18日(月)、

25日(月)の4日間

関連イベント 「小鳥の声を聞く会」 申込み要

5月10日(日) 午前4時30分～12時

学校教育における野鳥調査と 保護活動の実践から

田畑 孝宏

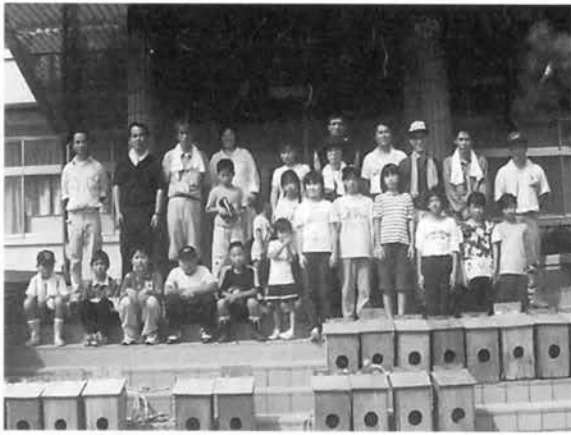
下伊那郡天龍村における

ブッポウソウの保護活動から

(天龍小学校開校十周年記念誌より)

分布が局地的で生息数も少ない本種は、昭和の初めからその生息地であった各地の寺社林が国の天然記念物に指定され保護されてきた。本県では本曾町御岳神社・八幡社がそれである。しかし、今ではそのほとんどの場所から本種は姿を消し、環境省・県指定の絶滅危惧種、県の天然記念物である。

昭和六十年に九番の繁殖が見つかった、県最北端に位置する下水内郡栄村では、翌年より枯れ朽ちた菅巢樹が雪の重さに耐えられず



ブッポウソウの巣箱と子どもたち

に倒れたり、巣穴に水が溜まって繁殖に失敗する番が見られたりするようになった。そこで、昭和六十三年より地元栄村立栄中学校科学部員らによる巣箱設置が行われるようになった。巣箱は毎五月の連休を利用して、本種の繁殖が確認された村内五地域にある七つのブナ林内へ計十〜二十個が設置されている。

巣箱かけを行った初年度は、繁殖した八番のうち一番のみの利用であったが、徐々に巣箱での繁殖数が増え、四年目には十番中七番が巣箱で繁殖するようになった。しかし、その後、栄村では年を追うごとに繁殖番数が減少し、平成十九年は六番の繁殖(うち一番のみ樹洞営巣)にとどまっている。

一方、県最南端に位置する下伊那郡天龍村では、平成九年四月、天龍村立平岡小学校(現天龍小学校)の四年生が、村内に環境の異なる五つの調査コースを設け、野鳥観察を始めた。一年間に二二〇回のセンサス調査を行った結果、三〇科六五種の野鳥を確認した。観察を続ける中で、子どもたちは役場庁舎の排気口で繁殖する本種をみつけ、その後、定期的に観察を続けた。

子どもたちと地域の方々を支えられ
確かに守られてきたブッポウソウ

平成九年七月十五日午前四時、四年生の子どもたち全員が天龍村役場の駐車場に集まっ

た。ブッポウソウの雛の誕生を確かめるためである。階下の駐車場でじっと耳を澄ますこと三十分。屋上にある排気口から「キチキチ・…」と、二羽の雛の声。

雛の誕生を喜び合い、無事に巣立つ日を願った。

その矢先の出来事だった。「先生、大

変だ。役場に足場がかかった「ブッポウソウ、大丈夫?」「このまま足場が組まれたら、ブッポウソウがだめになる」「どうしよう。校長先生にお願いするか」と、子どもたち。

汚れが目立つようになった役場庁舎の壁面塗装工事のため、ブッポウソウが繁殖する排気口のすぐ下まで鉄製パイプの足場が組み始められたのだ。

しかし、たった一番の鳥のために、村の大工事な中断できるのか。夕刻も迫る。子どもたちを帰宅させた後、夜まで迷った。無理をお願いしては、校長先生にも迷惑がかかる。しかし、ブッポウソウは県の天然記念物。子どもたちの願いでもある。これ以上工事が進んだら、ブッポウソウは巣を放棄するだろう。猶予はない。深夜、出張から戻られた山口起校長に工事の中断を申し出た。

翌日、秦正村長より工事中断の知らせが届く。子どもたちと共に、ブッポウソウの無事を喜んだ。その後、役場からは連日のように電話が。「まだ雛は巣立ちませんか。いつ頃巣立ちますか」「お盆明けには工事を済ませ



巣箱で繁殖するブッポウソウ

たい。契約した会社も予定が組めない。足場の費用も安くはない。担当された役場職員の方々も、心穏やかではなかったことだろう。私たちも、朝に夕に、観察に都合の良い天龍中学校のプール横から役場の排気口を覗く日々が続いた。

夏休みに入って四日目の七月二十九日、ようやく最後の雛の巣立ちを確認。一緒に雛の巣立ちを見守ってきた子どもたちも、ほっとした様子であった。無理もない、連日、早朝から炎天下での観察であったのだから。この出来事をきっかけに、子どもたちのブッポウソウ保護への気運はいつきに高まった。「巣箱を作っかけてよう」「林もいいけど、橋にもかけたら。だって、役場の排気口で繁殖するのだから」。こうして「めざそう!ブッポウソウのすむ村『天龍村』!」の活動が始まった。

実際に巣箱を作り始めたのは翌年四月。「なつみさんたち(向方小、福島小の子どもたち)が来たなら、一緒に作ろう」との、子どもたちの心遣いからである。子どもたちが五年生を

迎える平成十年は、天龍小学校開校の年でもあった(この年、村内三小学校一分校が統合した)。

巣箱の材料は、大工をされている歩美さんのお父さんが、丁寧に製材して届けてくださった。巣箱かけを支えてくださったのは、保護者の方々と、林業に携わる「天龍緑の少年団」指導員の方々。高い木の上の作業も慣れたものでした。天龍川にかかる橋に巣箱をかけるための高所作業車も、村の板倉電設社長さんのご厚意で借りることができた。こうして四月二十九日、無事巣箱設置完了。

しかし、一抹の不安もあった。四月に開かれた、村の「緑の少年団」打合せの会で、「橋に巣箱をかけてもいいが、本当にブッポウソウが入るのかな」と秦村長。子どもたちの願いはあるとはいえ、事を起こすことの重大さを感じた。「栄村(以前より調査している地域)のブナ林とは条件が違う。もしブッポウソウが巣箱に入らなかつたらどうしよう」。不安な日々が続いた。

五月十九日、郵便局員の宮澤俊教さんから吉報が届く。「清水口の橋の巣箱にブッポウ



高所作業車を使ってのブッポウソウの巣箱架け

本鳥類保護連盟主催、文部省・林野庁後援)において環境庁長官賞を、第五十八回(平成十六年)愛鳥週間全国野鳥保護のついで)において日本鳥類保護連盟会長賞を受賞するという

ソウが入ったに」。教室で、子どもたちと飛び上がって喜んだ。四日後の二十三日には、子どもたちが水神橋の巣箱でも利用を確認。こうしてこの年、役場庁舎排気口を含む三ヶ所でブッポウソウの繁殖を確認することができたのである。

巣箱かけによるブッポウソウの保護活動が始まって十年目、長野県内で確認された繁殖数は十五。そのうち九番が天龍村での繁殖になる。環境省、県指定の絶滅危惧種。県の天然記念物。希少種ブッポウソウは、この天龍村で、多くの方々の理解と協力と熱意によって、確かにその命を繋いでいる。

平成十年から始まったこの活動は、天龍村、天龍村教育委員会、天龍村緑の少年団、下伊那森林組合の協力を得るまでに至り、学校行事として位置づけられ、毎年四月下旬に行われている。天龍村村議会は、平成十一年に本種を「村鳥」に指定し、村ぐるみでこの鳥を大切に生きていく。天龍小学校の児童を中心に、地域住民が一体となつてこの希少種を保護する取り組みは、「第三十三回(平成十年)全国野生生物保護実績発表大会(環境庁・日

栄誉にも恵まれた。

「阿智村伍和にフクロウを呼びもとそう大作戦」(下伊那郡阿智村立阿智第二小学校の実践・第四十一回全国野生生物保護実績発表大会審査用要旨から抜粋)。

阿智村は

阿智村は長野県の西南部、日本百名山「恵那山」の東側に位置し、かつての街道「東山道」の通る富士見台高原「神坂峠」や、その麓に湧き出る「昼神温泉」のある村です。私たちの学校がある伍和地区は村の東部にあたり、村花「フクジュソウ」や、まだ雪の残る湿地に花を咲かせるゼンソウの群落、ミカワバイケイソウやその分布が特異なハナノキなども見られるのかな農村地域にあります。ここで、一昨年(平成十六年)より現六年生が野鳥観察を始めました。

野鳥観察を通して

観察は、学校周辺を中心に休日に年間十六回行ったほか、登校時や総合的な学習の時間にも行いました。一年間に地区内で観察した野鳥の種類は八十種になります。姿の美しいオオルリやキビタキ、ヘニマシコのほか、県



野鳥観察をする子どもたち

の絶滅危惧種にも指定されているアカショウビンやヨタカ、オオタカやサンコウチョウなども観察することがで

きました。こうした様々な野鳥との出会いを通して、私たちは身近な自然に目を向けるようになりました。そして、ふるさと伍和の自然の豊かさを実感するようになりました。観察を続けるうちに家族も野鳥に興味を持ち、お父さんやお母さん、そして兄弟姉妹も観察会に参加してくれるようになりました。

フクロウの保護活動

一昨年(四年時)の活動から

野鳥観察を始めて間もない四月八日、綾菜さんがフクロウの鳴き声を聞きました。おうちの方々に聞きすると、「昔はよく鳴き声を聞いたけれど、最近は聞かないな。」「お父さんが子どもの頃には神社の森に巣があって、ヒナを見たこともあったけれど、今じゃあもういないなあ。」とのことでした。伍和地区全戸にフクロウについてのアンケート調査をお願いすると、三十人の方々に回答をいただき、かつては地区内の八カ所ほどでフクロウが生息・繁殖していたことや、最近はまだ声も聞かないことなどがわかってきました。本やインターネットで調べると、県の準絶滅危惧種に指定されていること、巣箱で繁殖することもあることがわかってきました。そこで、貴重種フクロウを伍和に呼びもとそうと、巣箱を作つて地域の山林にかけられることにしました。巣箱を作るには材料が必要です。そこで、春に種を蒔いたサルビアやマリーゴールド、アゲラタムの苗を売って、材料費を集めることにしました。昼神温泉朝市組合にお願いしたところ、朝市で花の苗を売ることができるようになりました。六月と七月の土曜日の朝三回、朝市で苗売りをしました。名古屋や岐

阜、三重などの中京方面を中心に、東京、千葉、大阪など全国からいらした百名を超える方々が苗を買って下さいました。中には「お釣りは材料費に使って」とか、「苗はいらないから」と、お金だけを寄付をして下さる方々や、励ましの手紙を送って下さる方々もおられ、とても励みになりました。

八月二十八日と九月十一日に巣箱作りをしました。新聞の記事で私たちの活動を知った、県林務課の方々も材料の杉板を届けて下さったり、巣箱作りのお手伝いをして下さったりしました。巣箱作りで一番苦労したことは、巣箱や巣穴の大きさを決めることでした。本やインターネットで調べてもわかりません。そこで、信州大学教育学部教授の中村浩志先生に教えていただきました。巣箱は全部で三十六個作りました。お父さんやお母さん手伝っていたながらの巣箱作りでしたが、のこぎりを使ったり、インパクトドリル使ったりと、とても良い経験になりました。

十月三十日と十一月十三日に巣箱をかけました。巣箱は、実際に自分たちが鳴き声を聞いた場所と、地域の方々へのアンケート調査をもとに、声が聞かれた場所、かつてフクロウが繁殖・生息していた場所にかかけました。

昨年(五年時)の繁殖確認調査から

四月三日に、三十六個の全ての巣箱でフクロウの繁殖の有無を確認しました。はしごに登り、巣箱に手を入れた農志君が、「何かおる。」と言いました。「もしかしてフクロウ?」みんなの視線が農志君に集まりました。しかし、それはムササビでした。しかも、かわいい赤ちゃんが一匹いました。フクロウではなかったけれど、私たちが作った巣箱を使って

くれる動物がいて、うれしくなりました。結局、昨年はフクロウの繁殖を確認することはできませんでしたが、2つの巣箱でムササビが繁殖してくれました。

今年(六年時)の調査・活動から

今年四月一日、二年目の繁殖確認調査を行いました。その結果、三十六個の巣箱のうち三つの巣箱でフクロウの卵が見つかりました。卵が見つかった巣箱では、四月二十二日以降、一週間おきにヒナの成長の様子や親鳥が巣箱へ出入りする様子をカメラやビデオカメラで記録しました。

五月一日、三羽のヒナを確認した巣箱へ赤外線カメラを設置し、巣立つまでの様子を一日二十四時間記録しました。巣立ち後、巣箱の環境を比較し、フクロウが好む営巣環境を検討しました。その結果、次のことがわかってきました。

- フクロウが利用した巣箱には、以下のような特徴がある。
- ・巣箱の高さや斜面の傾き方向に傾向は見られない。
- ・フクロウによる利用が確認された巣箱は、いずれも人家から二百m以内の場所にかけたものであった。

- 三月中旬頃に産卵。卵は四月中旬に孵化し、五月中旬にヒナが巣立った。
- 餌はネズミが多く(70%)、小鳥やモグラ、リスのような大型の動物も運んでいた。
- 午後八時頃から翌朝五時頃にかけて、多いときは十六回も親鳥はヒナに餌を運んでいた。日中に餌を運ぶこともあった。

- オスとメスは、鳴き声ばかりか行動にも違いがあった。ヒナに餌を与えるのは主にメス。

ス。しかし、餌を捕るのはオスで、巣や巣の近くでメスを餌を渡しているようだ。○鳥にも、お互いを思いやる気持ちがある。昨年までは、学級としての取り組みでしたが、フクロウの繁殖をきっかけに、今年からは学校・育成会も協力して巣箱作りや巣箱かけを行って下さるようになりました。また、地域の方々も関心も高まり、自治会もフクロウの保護活動に協力して下さるようになりました。

終わりに

私たちは、三年間におよぶフクロウの保護活動と野鳥観察を通して、ふるさと伍和の自然の豊かさ、すばらしさを実感することが出来ました。そして、自然の厳しさや優しさも、さらには、多くの方々の親切や真心にも触れることができました。私たちの活動を理解し、支え、協力して下さった多くの方々には感謝いたします。本当に多くの方々から協力を得て、ようやく私たちが作った巣箱でフクロウが繁殖してくれるようになりました。今後も、みんなでこの活動を続け、フクロウを守っていくことができたらと考えています。

なお、この活動は、平成一八年九月三〇日に信州大学工学部で行われた「信州教育プラン21 プレゼンテーションコンクール」において最優秀賞を、十一月二十七日に環境省で行われた「第四十一回全国野生生物保護実績発表大会」において最高の環境大臣賞に恵まれることができました。

(飯田市立上村中学校)

訂正

『山と博物館』第53巻第4号のP2の一段目4行目の種名 *Eurema mandarina*(del'Orza, 1869)を *Eurema mandarina* (del'Orza, 1869)に、P2二段目8行目の触覚を、触角に訂正。

『山と博物館』第53巻第11号のP3二段目の写真解説「坑口下の崩壊地から出てきた鑄型(重量30kg、底には溶けた銅が付着している)」に訂正をお願い致します。

人事異動のお知らせ

平成二〇年三月三〇日付で臨時職員・前橋基子動物飼育員が退職しました。

平成二〇年四月一日付で庶務・合津明主查が産業建設部建設課維持係へ、学芸員・峯村隆主任が教育委員会生涯学習課文化財係へ、庶務・平林恵理子主事が民生部福祉課福祉係へ転出し、教育委員会生涯学習課文化財係より清水隆寿主任が、総務部税務課税務担当より岩田直美主事が転入、臨時職員・上良智動物飼育員が新規採用となりました。

平成二一年三月三〇日付で臨時職員・岩本尚也動物飼育員が退職しました。

平成二一年四月一日付で臨時職員・小嶋健太動物飼育員が新規採用となりました。

山と博物館 第54巻 第4号

発行 長野県大町市大町八〇五六一
〒398-0002 山と博物館
市立大町山岳博物館

TEL 026-133-0111
FAX 026-133-1111
E-mail: smpk@city.omatani.nagano.jp
URL: www.city.omatani.nagano.jp/smpk

印刷 大系タイムス株式会社
定価 年額 一,五〇〇円(送料含む) (切手不可)
郵便振替口座番号 〇五四〇一七二二九九